ぼくが見えるのは

大分中学校１年　　山地　基生

ぼくは、目が悪いです。五歳の時にわかりました。左目は〇．一以下で失明寸前と言われました。それから、二、三ヶ月に一度通院することになりました。今も、一年に一度程度通院しています。初めて診察を受けて一週間後から今までずっと眼鏡をかけています。眼鏡をかけていないと、周りがよく見えません。小さな文字の教科書や小説は、ぼやけて点がたくさん書いてあるだけの模様のように見えます。ぼくが、学校でちゃんと授業を受けられたり、楽しく本を読めたりするのは、お医者さんが失明する前に弱視を見つけてくれ、定期的に診療を受けられていることと、眼鏡があるおかげです。

眼科を定期的に受診することや、成長に合わせた眼鏡の購入が当たり前のようにできてきたのは、税金での援助があったからだということを知りました。幼稚園の時は、健康保険と市の子ども医療費助成で診療費は無料だったそうです。そして、初めてかけた眼鏡から今かけている眼鏡まで購入費用について、健康保険や斜視・弱視児童矯正眼鏡購入費等の助成といった補助を受けています。健康保険、子ども医療費助成、眼鏡購入費等の助成、全て税金を原資とするものです。

税金は、ぼくに視力を残してくれただけでなく、たくさんの人々に支えられて成長していることを教えてくれました。税金を納めているのは、ぼくの家族だけではありません。ぼくの知らないたくさんの人々が税金を納めています。つまり、ぼくの目の治療や、ぼくが見ることを、会ったことの無い人々が支えてくれているのです。もし、税金がなく、補助がなかったとしたら、診療費や眼鏡の購入費等は、自分で全て支払うことになります。それでは、今の視力を得られていないかもしれません。更に、それらへの負担から、自分の目のこと、健康な目に産んでくれなかった親のことを恨むかもしれません。目のいい人をうらやむかもしれません。でもたくさんの人に支えられていると知っているぼくには、そんな気持ちはありません。自分にしかない個性的な目だと自信を持っています。そして、税金を納めてくれている人々に感謝をしなければならないと考えています。しかし、大きな声で「ありがとう」をさけんでも全ての人には伝えられません。だから、ぼくのために税金が使われてよかったと誰からも思ってもらえる生き方をして感謝を表したいと思っています。そして、ぼくのように何らかの支援を必要とする人々を支えられる納税者の一人になりたいです。